

[message] すべては子どもたちの未来のために…

# 「自分ごと」に「伴走する人」がいるなかで 一人ひとりのリーダーシップが引き出されていく

認定NPO法人カタリバ

代表理事

今村久美

人に萎縮して発言できない  
その現状をどう打破するか

NPO法人カタリバでは、事業の二つとして「マイプロジェクト」に取り組んでいます。高校生が自分の「こうあってほしい」をプロジェクトにしてやってみて発表する活動です。その参加者が集うアワードで二昨年に優勝したのは、不登校経験者からなるチーム。学校に行く怖さを知る立場を生かし、

不登校の小中学生に「その経験を将来に生かせるように」仲間づくりや学習のサポートをしたチームでした。プロジェクトに挑戦するのは、前からリーダーだった子だけでなく、自分の悩みを見つめるなかで課題意識をもった子というケースも多いんです。カタリバでは高校生対象の「リーダーシップ育成プログラム」も行っていますが、これもいわゆるリーダーだけを対象にしたものではなく「誰もがリー

ダーシップを発揮できる」という考えでやっています。では、リーダーシップはどんなときに一人ひとりから引き出されるのでしょうか。大前提となるのは、「安心して発言できる環境をつくってあげる」ことだと私は思います。カタリバは様々な高校生向けプログラムを開発してきましたが、すべてに共通して大事にしてきたのは、関わる大人の姿勢です。高校生が悩んだときや何か







Kumi Imamura

学生だった2001年に任意団体NPOカタリバ設立(2006年法人格取得)。自身の高校・大学の体験から、「子どもたちが自分の可能性を広げていけるよう、親でも先生でもないナナメの関係の先輩と関わることで、いろんな気づきを得てほしい」と考え、高校生のためのプログラム「カタリバ」を始める。全国約1300の高校、約220,000人の高校生に「カタリバ」を提供してきた。関連書籍に『「カタリバ」という授業』上阪徹(英治出版)。2011年、東日本大震災の被災地を訪れたときに、「復興のために自分にできることをしたい」と語る現地の女子高生と出会い、一方で被災地の子どもへの支援が「与えるもの」に偏りがちな状況に違和感を覚える。「子どもたちには自分で自分の道を切り開く力を付けてほしい」と考え、被災地域の放課後学校「コロボ・スクール」を発案、2011年7月に「女川向学館」(宮城県)開校、同12月に「大槌臨学舎」(岩手県)開校。翌2012年、被災地の高校生の「地元のために私たちも何かしたい」という声を受け、高校生が自分の「こうあってほしい」をプロジェクトにしてやってみる「マイプロジェクト」始動。2013年度より「全国高校生 MY PROJECT AWARD」も開催され、2015年度の大会では、全国各地から115プロジェクト、282人のエントリーがあった。2008年「日経ウーマンオブザイヤー」受賞。2009年内閣府「女性のチャレンジ賞」受賞。現在、中央教育審議会教育課程企画特別部会委員。



リーダーシップ教育の理解を深めるための一冊

Book No.

5



『ビジネスパーソンが子どもたちに伝えたい 21世紀の生き方』  
酒井 稔 著  
ディスカバートウエンティワン

グローバルに事業を展開してきた人材コンサルタントが、自身の子育ての経験を元に語る、変動するこの時代の生き方。

をしたいとき、その思考プロセスに伴走しようとする。高校生の立場から見えているものを肯定し、そこをスタート地点に一緒に考えるのです。

高校生には、間違いを指摘される学びも大事だとは思いますが、人に萎縮して発言しなくなることを学習しきる前に、「思ったことはまずぶつけ合つて、みんなで答えを見つけたい」と感じてほしいのです。

生徒自身の成長のためにもリーダーシップが欠かせない

高校生が思いを表に出せるようになり、小さなことでも自分の意志で何かに取り組むと、そこで必ず「壁」にぶつかることも経験します。

マイプロジェクトの例で言えば、参加者は「二人では何もできない」と感じるんです。岩手県のある高校生は、家業の魚屋の魅力をどう発信するかを、SNSでつながった起業家をはじめ様々な大人とやり取りして考えを

今の日本でどれだけの高校生が「自分がやりたくてこれを頑張った」という経験をもっているでしょうか

深めていきました。

「自分の無知」も実感します。宮城県のある高校生は、地元を観光で盛り上げるプロジェクトを大人も巻き込んで進め、称賛されました。でも本人は「私はロジカルにものを考えられない、協力の仰ぎ方がわからずに人も傷つけた」と失敗体験も味わっています。大学に入るとしばらくは籠ったように勉強をしていました。座学は苦手だったのに「私、勉強します」と言うので、自分のやりたいことを探究するなかで経験したことが、学ぶ意欲を掻き立てたのです。

一人ひとりがちよつとずつリーダーシップを発揮していくことは、社会も求めていくことです。カリスマ的なリーダーはこれからも何人かは必要でしょうが、二部の人だけがリスクを取って社会を変革することは、情報が拡散して少しのミスにも批判が高まりやすくなった今は難しいですから。

だからカタリバのプログラムでは、問題解決型学習でも協同学習でも、形式にこだわるより、参加者が目の前の学びを「自分ごと化」して取り組んでいるかどうかを一番重視します。

そうやって「自分ごと」にリーダーシップをもつて取り組み、そのなかで学びたいことも見つけて自身を成長させる、という学習サイクルを、今後はどんな子でも経験する必要があると思います。社会に出たとき、勤め先が手厚く教育投資をしてくれるとは限らず、「こんなことをしたいからこれを学びたい」と自分で教育機会を獲得していく力がないと、成長しづらい時代だからです。

例えばグループ学習も、ただ行うのでは、チーム内で自分の役割を果たすことは学べても、役割にだけ徹して自分の思いは引込められる子が出てきます。そうではなく、「あなたは思う？」という自分の探究から始まる学びがもつと増えてほしい。今の日本でどれだけの高校生が「自分がやりたくてこれを頑張った」と言える経験をもっているでしょうか。

私は、その経験こそが学びとなり、人生の糧になると思うのです。